

須坂園芸高校 実習田で多収穫研究 (FAINAL)

去る、最高気温が30度を都内でも迎えた10月2日、長野県須坂園芸高校の須坂実習田にて坪刈調査が行われた。10年前の長野北信地域では盆を過ぎると冷たい風が吹いて秋の装いをみせるのだが、取材当日は汗ばむほどの天気を実習した生徒・先生方はとても体に堪えた様子だった。出穂直後に台風16号が長野県下にも影響があり、風に擦られて圃場周りの稲穂の色が白くなっていたものもあり、また出穂後は日照不足も続いたことから9月15日現在での農水省が発表した作況指数は県下96（ただし北信は101）と天候には恵まれていない状況下の中で取れ高に一抹の不安を感じながら当日を迎えた。写真右側の品種はコシヒカリである。想定内ではあったがケイ酸資材を施肥していたにもかかわらず倒伏してしまっていた（コンバインは入る程度 倒伏指数でいうと4程度）。チッソ肥料が10a当たり多施用区では10kg入っており草丈が95cm以上も伸びていたため致し方ないところである。一方、高温障害に強く短穂でコシヒカリよりも多収性があるとされている風さやかは見事期待に答えてくれた。同品種の長野県平均反収は712kgであるが120kg以上多く穫る目標は達成出来た。（本年度の風さやか最高反収は10a当たり842kg チッソ施肥量8kg 植付本数6本/株）草丈はコシヒカリよりも26cmも低く、着粒数は15%も多い。多施肥区の茎数は両品種ともに25～26本、親穂の1穂着粒数はコシヒカリが100粒程度、風さやかでは115粒程度。増収イコール食味低下が通説になっているが、食味値の結果もそうとはならずまずまずの値となっていた。さすがは多収穫長野県。ポテンシャルの高さを現場で実感出来た次第であった。坪刈方法は各区100株を丁寧に根っこから刈取り、収量（食味値を含む）及び収量構成要素を算出した結果が以下の通り。なお、構成要素は平均茎数株5株から、収量は残りの95株より得られた結果である。1年間生徒たちが管理してきた成果が表れた。今回快く取材に応じていただいた須坂園芸高校の小椋校長先生、指導教諭の竹元先生、倉科先生、並びに農業経済科流通経済コースの生徒の皆様は書面を借りて改めて御礼申し上げます。（次ページの栽培試験結果報告へ続く）



圃場中央より左はコシヒカリ、右は風さやか（手前は無肥料区）



上段右竹元先生、上段左倉科先生と農業経済科流通経済コース3年生の生徒のみなさん

須坂園芸高校の小椋校長先生、指導教諭の竹元先生、倉科先生、並びに農業経済科流通経済コースの生徒の皆様は書面を借りて改めて御礼申し上げます。（次ページの栽培試験結果報告へ続く）

須坂園芸高校における2014年度水稻栽培試験結果(概要)

品種	N施肥量	植付本数	穂長	穂数/m ²	籾数/穂	登熟歩合(%)	千粒重	精玄米収量(kg)	水分(%)	たんぱく(%)	スコア
コシヒカリ	7	6	16	506	67	87	21.5	633	12.9	6.9	76
	4	6	15	364	74	88.8	21.5	512	12.7	6.5	82
	4	3	16	386	71	92.3	21.7	549	12.6	6.4	82
	7	3	17	377	85	88.9	21.7	618	12.6	6.6	82
風さやか	10	6	14	537	79	88.8	21.9	826	12.7	7.4	76
	8	3	15	471	88	86.8	21.6	780	12.7	7.6	75
	10	3	16	448	87	88.2	21.8	747	12.8	6.9	81
	8	6	15	511	86	87.5	21.8	842	12.8	7.2	79

福島県伊達地方名産「あんぽ柿」復活の一步を遂げる！

11月11日の新聞やTV報道でも話題となった、福島県産あんぽ柿が3年ぶりに出荷の運びとなった。あんぽ柿が3年間も出荷が出来なかったのには理由がある。当社の特約店のスタッフにあんぽ柿を生産している方がいらっしやっただので披露したい。

平成23年の東日本大震災による福島原発事故を受けて、出荷前の「あんぽ柿」は全て自粛となった。平成24年は全地区での生産自粛、25年からは梁川町などで試験生産となり最盛期の約1/5が生産可能となった。本年は一部の地区を除き、ようやく全量生産可能となったが、これまでの道のりは大変苦労の連続であったとのこと。

コメやその他の果樹と違って何故あんぽ柿の出荷が難しかったかは理由がある。あんぽ柿は生柿を加工・乾燥して作られるため、生産過程で放射性セシウムが濃縮される恐れがあったことから徹底した対策を講じなければならなかった。復活の道のりの第一歩として樹体の洗浄から始まり、土壌の除染、剪定作業をしなければならなかった。剪定は毎年行われるのだが、この作業だけで高齢の生産者は辞めてしまう方々が大勢いたようだ。事故発生の翌年まで殆ど手がつけられず、そのまま剪定もされない鈴なりになりっぱなしの柿の木も多く、心を痛めたとの事である。

消費者の皆様へ受け入れていただくための努力は続いた。安全を期すために、出来た原料の柿は時間も手間も相当かけて3つのステップからなる放射性セシウム検査を経ている。さらに生産者の方々には裏付けの資料としてGAPの導入を行い、安全安心な食品として万全を期す体制となっている。しかしながら、3年の空白で他産地の干し柿にとって代わられており、これから巻き返すには産地一丸となった推進活動が必要であろう。

復活の1歩を遂げた、生産者の努力の結晶である「福島県のあんぽ柿」を是非ご賞味ください！



《菱肥会総会開催のお知らせ》来る11月20日(木)13時より 経団連会館(東京・大手町)に於いて、菱肥会総会が開催されます。ご案内の皆様のお越しをお待ち申し上げます。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp